

駐車場の隅で軽トラックの荷ごしらえをしている老いた男の頭が動いた。父だ。手をとめて顔をあげ、老眼鏡ごしの視線が一瞬こちらに向く。頭髪が白い。母は加代の手を握りしめて訊いた。

「どうしたん…大丈夫？ 何かあったんかい…」

「大丈夫よ。何も無い…。会いたくなかったから…」

加代は声を詰まらせる。母は目を潤ませて矢つぎばやに喋りだす。今日は土曜日なので一時から工作教室があり、父は今から公民館へ出かけるところだそう。加代は以前に正枝から聞いていたことをはっと思い出した。ボランティアで工作教室を開いてもう十年余りになるらしい。父はその労をねぎらわれて町から表彰されたとも、正枝は言っていた。連絡も入れずいきなり来てしまったのはまずかったと後悔が頭を掠める。

父の思いはうかがい知れない。何ごともなかったように黙々と作業を続けている。工作材料を入れてあるらしい不揃いなダンボール箱の上にシートを被せ、荷造りロ―プで留めて仕上げているようだ。

「お母さんも行って手伝うの？」

加代が訊くと、言い終わらないうちに、

「馬鹿を言うな。婆さんが付いて来たら、邪魔だろうが…」

いきなり父のしゃがれた声が聞えてきた。口調は激しくない。少なくとも怒ってはいないようだ。母と加代は思わず目を見合わせた。母は足を縫いながら父の傍らに走り寄っていく。加代は幼子みたいに母の後を追った。

母は興奮した口ぶりで、出かけるのを少し遅らせるよう父に説得を始めた。父は

それを無視して、さっさと運転席に乗り込み窓から顔をのぞかせた。

「女の話に付き合うとる暇なんかないぞ。講師が遅刻してどうするん？…」

先ほどよりは口調は柔らかくなつたようだが父は早口に喋り、ことさら急いでいるふうにウィンドガラスを乱暴に閉めエンジンをかけた。

「運転、気をつけて…」

母の背に寄り添つた加代はおそろおそろ声をかけた。いつのまにか涙が滲んで、父の顔がみるみるぼやけるのを止めることができない。

父を見送って家に入ると母は加代の昼食をつくるために台所に立つ。加代は食堂のテーブルについて母の後ろ姿に目を注いだ。料理の手際よさは昔と少しも変わっていないが、褪せたベージュのサロンエプロンのたすき掛けが今にも肩からずり落ちそうになっている。

加代は訊かれるままに浩史のことを話した。会社を辞めて自営になったと知ると母は調理の手を休めて言った。

「やっぱり、血は争えんなあ。お父さんの孫だわなあ…」

長年、父に商売で苦労をさせられたことも忘れていくらしく皺だらけの顔を加代の方に向けて笑う。出来上がった月見うどんを加代は美味しそうに食べた。母は娘の食べっぷりを眺めて満足したのか、テーブルの向かいの席に座りこんで話の続きを待つ。

外川の話になると、昔のいきさつを蘇らせたのだろうか、「あの人は…」と横槍を入れてくる。外川が今も現役で会社経営に携わっていることには不満らしく、ちよつと眉を寄せた。浩史との関係を話し、外川からの言葉を付け加えると、母は面持

ちが少し緩んで独り言のように呟いた。

「そう…、まあ、よかったわ」

母は立ち上がったってコーヒーを入れた。父が出かけて一時間ほど経っただろうか、夕方までかかるはずだったのに、いきなり父が戻ってきた。車に積み込んだはずの箱が一つ足りなかったとかでまっすぐ店の間に入る。

今ではここが父の仕事場だ。母もそちらに駆け込む。箱はすぐに見つけた。二人は積み忘れたのは相手のせいだといわんばかりの顔を突き合わせている。自分がいきなり来たせいだ。加代は心配になった。

「講師が抜けてきていいの？」

「今日は、助手の大学生が二人も来てくれとるから…」

父は初めてまともに加代のほうへ顔をむけた。すっかり頬がこけて、眉にも白いものが混じっている。母はこのときとばかりに、コーヒーを入れてあげるからと父の返事も待たずに勝手に用意をした。父はしぶしぶ空いている席に腰掛ける。カップにコーヒーを注ぎながらも母は喋り続けている。

「あのね、浩史は東京で映像制作会社を自分ひとりで作ってるんだって」

母の話は瞬く間に外川まで到達する。その成功を羨むような口ぶりもある。加代はとどこどころ遮って補足していく。外川が今も父への恩義を忘れていないと浩史の言葉を借りてそのまま伝えた。父はまだ熱そうなコーヒーを黙って飲み干し、口を開いた。

「まあな、外川も年だ。こんどのりちぎは本物じゃろうさ。だがなあ、浩史にこれだけは言っとけ、金儲けのために独立したのか、それとも納得がいく仕事をするた

めか、そこんところをすっかり決めておかなきゃ、あとで後悔するぞって、なつ。まあ、奴が役に立ってくれりゃ、いいけどなあ……」

父の言葉は思いがけなかった。意外なほどに、昔のしがらみが感じられない。父の性格はこれほど大らかだったのか。何事にも屈託のない浩史の気質が頭に浮かぶ。祖父譲りなのだろうか。それを改めて父の口から自分に投げかけられたような気がする。

言い終えた父はさっと傍らの箱を抱えて廊下へ出た。加代は急いで追っていく。二人のたてるスリッパの足音が快く響いた。父は着古したグレーの作業着をおつていた。加代は厚みを失った父の肩を戸口で見送った。母がいつのまにか加代の後ろに立って得意げに報告する。

「あの人、いい年して、いまだに発明から離れられんのよ。小学生の発明工夫展に出させる工作を後押しして、一生懸命なんや……」

加代はほっとして笑みを返す。それを見とどけてから母は嬉しそうに付け加えた。「晩になったら弘子に電話しなくっちゃ。加代ちゃんが来たって知ったら、どんな顔するやろうか」

久しぶりに家の中を巡った。店の部分は土間なので工作機器がぎっしりで父の細工場になっていた。居間はパソコンと関連機器がばをきかせ狭い感じだ。それにしても四尺筆筒が見当たらない。

「ああ、二階へ上げたけど、筆筒が、どうかしたん」

台所で洗い物をしていた母が腑に落ちないようすで手を止める。加代は舞扇のことももちだした。母は顔をあげて遠くを見る目になって考えていたが、思い出したようだ。

「そうや、確かあのままやわ」

「箆笥の中、見てきていいかな…」

「自分の家だろう。捜してきたら…」

加代は階段を上がった。築五十年に近い家だから、みしみしと床が軋む。途中、立ち止まって二階の踊り場を見上げると開け放した高い小窓から青空がのぞいている。

“とうとう、来たよ” 一刻も早く浩史に知らせてやりたいと思う。

座敷の窓は兩戸が閉められていて、真昼なのに薄暗い。ここは二十三歳の秋まで加代が寝起きた場所だ。馴染み深い花柄のカーテンはひときわ色合いを淡くして内側から窓を覆っている。

四尺箆笥は奥の壁を背にしてひっそりと立っていた。加代はためらわず上部の扉を開いた。ナフタリンの匂いが鼻をつく。一番上の小物棚をまさぐると、帯締めおびじの箱はこがいくつも手に触る。喪服用の小物セットの箱はこのもうひとつ奥まったところで何やら布切れに包まれた硬いものが指の先に当たった。取り出してみると見覚えのある紫の小風呂敷むすひの包つつみが現れた。加代ははやる心を抑え、掌てのひらの上でゆっくりとそれをめくった。

まがいもなくあの扇だ。柄をびっちり閉じている。風呂敷は棚にもどし扇おうちぎをとりあげ、一節ごと確かめながら指先に力を入れ、だんだんと開いていく。くすんだ薄紅色の模様が加代の瞳に拡がってくる。座敷を出て踊り場の小窓の前に寄り、慎重つづましく指を揃えて扇を持ち高くかざす。晴れた空が華霞模様はながすみに射しこみ、青く淡く映えた扇は加代の心の内に輝いている。

耳を澄ますと階下で母の足音が聞える。店の間のほうでも人の気配けはいがする。父が

もう帰ったのだからかと加代は思った。

(以上平成24年1月16日放送分)

(完)